図書紹介（87）

『ニーバーとリベラリズム―ラインホールド・ニーバーの神学的視点の探求』

高橋義文著　聖学院大学出版会　2014 年

おやさと研究所助教
澤井　治郎　*Jiro Sawai*

本書の主題は、ラインホールド・ニーバーの思想や活動をめぐるものである。まずは、その人物について紹介したい。ニーバーは 1891 年アメリカ中西部のドイツ移民系の牧師家庭に生まれた。地方都市の非主流派教会の一牧師という立場から、赴任地での活動や言論活動によって頭角を現し、ニューヨークのユニオン神学校に招へいされると、知的で厳格な神学思想、倫理学を展開して同校の名声を高め、1972 年にこの世を去るころには 20 世紀のキリスト教神学界の巨人と評されるようになっていた。ニーバーはいわゆる教会内の問題のみならず、幅広く社会問題、とりわけ国際問題を含む政治の領域で頻繁に発言、活動したことでも有名である。それは、第二次大戦時に絶対平和主義を批判し、アメリカの介入を主張したこと。大戦後に国務省の外交問題評議会や、トルーマン政権下の政策立案室で戦後アメリカの外交政策に関与したことに特徴的にあらわれている。近年では、2008 年の大統領選挙の際にオバマに影響を与えた神学者として改めて注目された。

ニーバーを詳しく知らない人々にも、「ニーバーの祈り」あるいは「セレニティ・プレイヤー」と呼ばれる祈りの言葉は広く知られている。それは 1930 年代か 40 年代にニーバーがつくったとされるもので、第二次大戦中に何十万ものアメリカ軍兵士に配布され、アルコール依存症患者更生会（Alcoholics Anonymous）や他の様々な依存症患者を支援する組織によって使用されているほか、多くの政治家や著名人がこの言葉を引用してきた。日本でも、元総理大臣が座右の銘にあげていたり、数年前の『朝日新聞』の「天声人語」で紹介されたりした。また、歌手の宇多田ヒカルの楽曲で使われているとも言われている。

本書は、日本におけるニーバー研究の第一人者である著者が、これまで発表してきた研究論文をもとに構成されており、最新の成果がまとめられている。第 1 部では、アメリカの社会福音運動（ソーシャル・ゴスペル）やマルクス主義という神学的、思想的なリベラリズムの潮流とニーバーはいかにつきあい、乗り越えていったのかを描き、続いて、非政党的政治組織「民主的行動を目指すアメリカ人」（Americans for Democratic Action 以下 ADA）の創設とその展開を整理しながら、第二次大戦後のアメリカ政治を規定した政治的リベラリズムにおけるニーバーの位置を論じている。第 2 部では、よりニーバーの思想自体の中に分け入って、しばしばアメリカ史研究に援用されている彼の「アイロニー」概念や、これまで一般にニーバーには希薄だと考えられてきたピューリタニズムとの関連や教会論というモチーフを取り上げて、ニーバーによる歴史、デモクラシー、キリスト教の理解を掘り下げて提示しようとしている。第 3 部では、ニーバー後の神学界では高名なモルトマンやハワーワスによるニーバー批判を取り上げて、その問題点を論じている。一言でいうならば、批判者はニーバーの思想を「驚くほど通俗的皮相的にしか理解していない」ということになるだろう。

ニーバーを研究対象として読もうとする人は別にして、宗教、社会、政治の絡む問題に関心ある人が最も興味をひかれるのは第 1 部の第 3 章ではないかと思う。ADA は、1947 年 1 月、アメリカの国内問題ではニューディール政策の拡大・推進、市民的自由の擁護・拡大、国際問題では国連の支持と自由主義諸国の積極的な支援、共産主義との絶縁を掲げて設立された。現実的には、民主党と同調することが多く、とくに冷戦時代やその後を通じて、トルーマン、ケネディ、ジョンソン、カーター、クリントン、オバマの各民主党政権を一貫して支持し、多くの ADA 会員が政権の重役として参加してきた。とりわけ、大統領選挙では大きな影響力を行使し、「民主党の現役大統領や候補者たちが ADA の大会に出席・演説することも少なくなかった」という。

その設立には、著名な歴史学者、政治家、経済学者とともに神学者ニーバーが関与していた。ADA の前身「民主的行動を目指す連合」（Union for Democratic Action）でニーバーは 1941 年の設立以来議長を務め、ADA への発展に中心的な役割を果たしたことが、本書で明らかにされている。こうした活動や上記のように政権の政策立案にも関与していたことをみてくると、ニーバーが社会活動家か政治家であるかのように思えてくる。しかし、彼は 20 世紀アメリカを代表するキリスト教神学者として知られ、その活動の広さから公共の神学者などとも呼ばれている。ここに本書やニーバーについて読むことの面白さがある。ニーバーはキリスト教神学者として現実的な政治的問題に関与したのであり、その活動は彼の厳格な神学思想に裏付けられたものであった。つまり、彼の政治活動にはかなり明確に宗教的な次元が働いているのである。それは単にニーバー個人に限定される問題ではなくて、アメリカ政治が含みこんでいる宗教性とも深く繋がっている。現代の超大国アメリカの政治がどのような宗教的意識に基づいているのか。そうした問題を考えるために、一つの面白い具体例を本書は提供していると言えるだろう。

内容は以下の通り。

第 1 部　ニーバーとリベラリズム
　第 1 章　ニーバーと社会福音運動
　第 2 章　ニーバーとマルクス主義
　第 3 章　ニーバーと「民主的行動を目指すアメリカ人」（ADA）
第 2 部　ニーバーの視座
　第 4 章　ニーバーとアイロニー
　第 5 章　ニーバーとピューリタニズム
　第 6 章　ニーバーの教会論
第 3 部　ニーバー批判をめぐる議論
　第 7 章　ユルゲン・モルトマンのニーバー批判をめぐって
　第 8 章　スタンリー・ハワーワスのニーバー批判をめぐって
補遺 1　ソーシャルワークをめぐるニーバーの視点
補遺 2　ニーバーの著作の翻訳について